

～名古屋大学留学生相談室（740号室）活動報告～

高木ひとみ

はじめに

2010年度は、後期から産前産後休業・育児休業に入るにあたり、これまで行ってきた活動がよりよい形で継続されていくよう引き継ぎにつとめた。多くの教職員や学生の協力により、後期も活動が発展していき、名古屋大学のキャンパスにおいて必要とされる国際教育交流の場や予防教育の場を生み出すことが可能となった。本報告では、2010年度の活動を「国際教育プログラム」、「相談活動」、「セミナー・地域連携・その他」の3つに分けて報告する。

I. 国際教育プログラム

◆多文化間ディスカッショングループ

2010年度前期は、2グループ（日本語グループ、英語グループ）開催した。日本語グループは、参加者11名（留学生7名、一般学生4名）とファシリテーター1名、英語グループは、参加者11名（留学生6名、一般学生5名）とファシリテーター2名で行われた。両グループとも参加学生が活発にコミュニケーションを取り、様々なテーマについて語り合うことができた。特に英語グループにおいては、言語能力の違いなどによりディスカッション方法の工夫が必要とされたが、少人数グループでディスカッションしてから全体で話す形式を取り入れ、英語を用いて積極的に関わられる環境を作っていた。多文化間ディスカッショングループは、グループ運営の際に、高度なグループ・ファシリテーション能力が求められ、ファシリテーターのスーパービジョン（助言・指導）が必要とされるため、代替教員が配置されない2010年度後期は、休止することとした。

◆スモールワールド・コーヒーアワー

2010年度は6回開催し、参加者は約400人であった。前期は「自己紹介ビンゴゲーム」、「日本のKids体験&ミニコンサート」、「グループ対抗ワールドクイズ」、

後期は「自己紹介ビンゴ」、「おにぎりアワー」、「年賀状作り」などのテーマで行われた。他に6月には、他の国際交流グループと共同で「インターナショナル・フリーマーケット」を開催し、各グループの活動の幅を広げるための活動資金を得た。9月下旬には、2日間にわたり、コーヒーアワー合宿（日帰り合宿）を開催し、コーヒーアワーの学生グループがさらに学生の主体性を活かしながら活動していける団体となるよう、コーヒーアワーのミッションの確認、組織運営、活動記録のテンプレート化、活動計画等の話し合いを行った。この合宿により、学生スタッフたちが、組織運営を意識しながら、コーヒーアワーのグループについて考えられるようになり、より主体的にコーヒーアワーの活動に取り組めるようになった。

後期のコーヒーアワーの開催とコーヒーアワー学生スタッフの教育的支援は、留学生相談室事務室の白石氏が担当した。白石氏と学生スタッフの協力により、後期もキャンパスにとって必要な交流とコミュニケーションの場であるコーヒーアワーを開催することが可能となった。

◆グローバル・リーダー育成プログラム

本年度のグローバル・リーダー育成プログラムの、第一回目は、2010年9月に「自分の強みを発見して世界に羽ばたこう！」をテーマに開催した。今回のプログラムは、学生たちが自分の強みを発見し、今後の学生生活において何かにチャレンジする際（例えば、海外へ行く、留学生生活を充実させる、リエントリー＜異文化再適応＞を経験する、就職活動に取組む、社会人になる等）に、役立つ力を強化することを目的に行われた。九州産業大学の平井達也氏を講師として招き、24名の学生（留学生5名）が参加した。平井氏は、ポジティブ心理学を用いた活動を通して、自分自身の生活を丁寧に振り返り、自分の「強み」や「レジリエンス（困難な状況においても、それに上手く対処し、乗り越えることのできる能力）」を発見する機会を提供した。参加学生たちは、自分自身を発見するだけではな

く、グループワークを通して、他の人の「強み」も発見する機会に恵まれ、日常生活において応用できる力を身につけることができた。

第二回目は、国際交流協力推進本部の虎岩氏と渡部氏が引き継ぎ、学生による実行委員と共に、2010年12月に名古屋大学国際学生フォーラム（International Forum at Nagoya University: IF@N）を開催した。

これまで筆者は、名古屋大学における国際交流活動を教育的にサポートしてきたが、学生が主体的に活動している国際交流のレベルを上げ、さらに幅を広げるために、本フォーラムのようなプログラムを開催できたらと考えてきた。本フォーラムは、神戸大学の「留学生と日本人学生による国際学生交流シンポジウム」や、静岡県留学生等交流推進協議会の「話っ、輪っ、和っ！」日本学生支援機構東海支部の「地球家族セミナー」などの取組みを参考にし、留学生や一般学生が共に「学生」という同じ立場を分かちあいながら、自由活発に討議し、国際理解や相互理解を深め、国際的に活躍できる人材を育成することを目的とした。教員コーディネーターをつとめた虎岩氏と渡部氏は、一般学生や留学生11名による学生の実行委員会をつくり、教育的に支援した。フォーラムは2010年12月12日に開催され、参加者は24名（留学生15名）であった。分科会は、「教育」、「コミュニケーション」、「ジェンダー」、「就職」、「人間関係」のテーマが設定され、活発に意見交換や発表などが行われた。フォーラムの内容に関する詳しい報告は実行委員によって作成された「IF@N 第一回・名古屋大学国際学生フォーラム報告書」を参照していただきたい。

本フォーラムは、名古屋大学において初めての取組みであり、参加者だけでなく、教員コーディネーターの虎岩氏、渡部氏、そして実行委員の学生たちにとっても、学びと成長をもたらす貴重な機会となった様子である。今後も名古屋大学において、このような学生のアカデミックな交流、そして個々人の対話を促すことのできる教育プログラムが開催されていくことを願っている。

◆ 博士論文サポートグループ

2010年度前期は月に1回、博士論文サポートグループを開催した。孤立しやすい博士課程の留学生たち、家庭と学業との両立に悩みながらも博士論文研究を進める留学生たちなどが参加した。毎回、ほぼ同じメン

バーが集い、家庭や生活などの近況報告、研究の進捗状況などを共有し、次月の博士論文研究の計画を立て、発表しあった。参加学生たちにとっては、研究を進める上で良いペースメーカーになっているとの声が聞かれた。2010年度後期からは、このグループは休止するが、またより学生のニーズに合わせたグループとして再開できたらと考えている。

◆ Nagoya University Global Network

昨年度から始めた名古屋大学内における国際交流や異文化理解を促進することに関わる学生グループのネットワーク活動「Nagoya University Global Network」を留学生センターの田中氏、柴垣氏が引き継ぎ、今年度も本ネットワークの活動報告書「名古屋大学国際交流グループ 2010年度活動報告書」を発行することが可能となった。本年度より、「スモールワールド・コーヒアワー」、「ヘルプデスク」、「ランゲージシャワー」、「留学のとびら」、「ACE」、「NUFSA」に加えて、「IF@N」が参加し、報告書を作成した。今後も、名古屋大学における学生主体の国際教育交流活動が活発に発展していくよう各グループをサポートする教職員の支援のもと、このような報告書が発行されていくことを願っている。

Ⅱ. アドバイジング・カウンセリング

2010年度は、6～7コマの相談時間を設け、日本語と英語による個別相談（情報提供、アドバイジング、カウンセリング）を行った。名古屋大学に在籍する留学生からの相談に限らず、在學生、教職員、地域からの相談などにも対応した。相談は、学業、対人関係、身体健康、精神保健、家庭・家族、生活適応、異文化適応、学生生活、国際交流、進路・就職などの内容のものがあ、必要に応じて、学内外の構成員と連携しながら対応していった。

Ⅲ. セミナー・地域連携・その他

【セミナー・地域連携】

1. JAFSA（国際教育交流協議会）

2010年8月26日～27日「初任者研修：国際教育交流概論（留学生アドバイジング）」

【SD・FD 活動】

1. 留学生相談室スタディーグループ

2008年度から始めた「留学生相談室スタディーグループ」の運営を国際交流教育推進本部の渡部氏が引き継ぎ、毎月1回、教職員の相互学習の勉強会の場が開催された。毎回、主に文献の講読と、ディスカッションという形式を取っているが、多くの教職員にとって、新しい知識を学び、普段の業務を振り返り、語り合える場は貴重な機会になっているようである。今後も渡部氏をはじめ、他の教職員のサポートによりこの勉強会が継続されていくことを願っている。

2. 留学生研究会

高等教育研究センターが名古屋大学の教員有志による「留学生研究会」を立ち上げ、筆者自身も研究会メンバーとして、「教員のための留学生受け入れハンドブック」の発行を目指して、研究会活動に参加した。留学生支援を進めるにあたり、受け入れ側の「教員」に焦点を当て、教員がより留学生を受け入れやすくなるよう、また指導しやすくなるよう、アンケート調査を実施し、ハンドブックを完成させた。高等教育の専門

家である高等教育研究センターの教員、部局の留学生担当教員、留学生センターや留学生相談室の教員などが、チームとして議論し協力して進めたことにより、広い知見が集まり、ハンドブックを作成することができたのではないかと考えている。詳しくは、高等教育研究センターが発行した「名古屋大学教員のための留学生受け入れハンドブック」を参照されたい。

おわりに

筆者は、本報告を執筆の間、初めて自分自身が子どもを育てながら、自治体等による「母親支援」、「子育て支援」などのサービスを受ける機会を得ており、「支援を受ける側」を体験した。留学生相談室において、留学生教育や国際教育交流活動に取り組んでいる際には、常に「支援を提供する側」であったため、反対側の立場を経験することが非常に新鮮である。また、同時に「支援を受ける側」の気持ちやニーズなど、学ぶことが多く、さらに自分自身のこれまでの仕事を振り返る機会になっている。育児休業中に養われる感性を大事にしながら、さらに仕事に取り組んでいきたいと思う。